



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報第8号



編集・発行 東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2010年3月15日
〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL(022)795-7556 FAX(022)795-7583 E-MAIL <dosokai@intcul.tohoku.ac.jp>

心の地図の港

小林 文生

(国際文化研究科同窓会会長、ヨーロッパ文化論講座教授)

国際文化研究科同窓生の皆様には、全国各地、そして世界の各地でご活躍のこととお慶び申し上げます。

前号でご紹介したように、国際文化研究科は平成21年度に講座改編を実施し、この4月からは新たな体制の下で初の新入生を迎え入れることになります。講座の新設ないしは発展的な分離統合、また講座名の変更等、学問分野や社会情勢の変化によりよく対応するための改編ですが、それはもちろん、研究科創設以来の理念に基づく教育研究の積み重ねの上に成り立つものであり、同窓生の皆様の足跡とともに刻まれた貴重な歴史へとつながるものであります。

「学際的、総合的」というキーワードを掲げた新たな学問領域としての「国際文化学」の研究を通して、また、それを共に追究する恩師や先輩後輩とのコミュニケーションを通して、今、皆様の心に根付いているものは何でしょうか。私がこれまで接してきた皆様と交わした議論を思い起こしてみると、国際文化研究科で分野の別にかかわらずに共通するのは、「視点の多様性」と「相対化」ではないかと思います。何らかの新たな視点から見つめ直すことによって、それまで見えなかった側面に気づくとともに、そのことによって、対象を従来とは異なる位置に据えて捉え直すことができる。そのような共通の思考が、本研究科の過去から現在へとつながっていると思います。

本研究科は独立研究科なので、同窓生といっても、4年間の学部学生から継続して在籍する部局の場合と比べると、在籍時の年齢も期間も違い、したがって「同窓会」に対する感じ方も異なるかもしれません。また、今年でやっと18年目という若い研究科ですから、同窓会の歴史的な重みというもの、他とはちがうかもしれません。とはいえ、本同窓会もゆっくりではありますが着実に歩み続けています。年間の活動は、定例の総会と講演会が主たるもので、まだバラエティ

に富んでいるとは言えませんが、学会や講演会などの機会に同窓生が駆けつけてくださる姿を拝見するたびに、とても嬉しく、またありがたく感じています。また、それぞれの講座単位では同窓生どうし、先輩と後輩との情報交換等が活発に行われているようですので、これを同窓会全体として活発なかたちにしていくように、運営を工夫しようと考えています。メールや会報を通して呼びかけをしますので、そのときにはぜひご協力をよろしくお願いいたします。

同窓生の皆様にとって、国際文化研究科はかつて自分のいた場所、ないしは今もいる場所として、言い換えれば自分がそこに帰属する場所としてつねにあり続けています。人によって、帰属意識には濃淡があるかと思いますが、それぞれの方の人生の大きな通過点のひとつであることは確かでしょう。どこにいても、どこからでも、いつでも立ち寄ることのできる一つの豊かな港として、国際文化研究科は皆様の心の地図の中に描き込まれているのではないのでしょうか。

第9回同窓会総会と講演会のご案内

第9回同窓会総会と同窓会講演会を次の通り開催します。またこれに引き続き国際文化研究科平成21年度修了祝賀会が開催されます。同窓会会員の皆さまにはどちらにも奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時：2010年3月25日(木)15時～

* 研究科学位記伝達式に引き続き開催しますので、会員の皆さまは14時20分の学位記伝達式からご臨席ください。

場所：マルチメディア教育研究棟6階大ホール

講師：山崎 和美

(財団法人中東調査会専任研究員・イスラム圏研究講座博士課程後期3年の課程修了)

演題：「イラン女性による現状打破のための挑戦
—教育と映画を事例として—」

第8回総会と講演会の報告

第8回総会を2009年3月25日にマルチメディア教育研究棟6階大ホールにて開催しました。総会に先立ち、金丸芙美氏による講演会を開催しました。

講演会要旨

多言語社会研究から見るアジアと日本 —きっかけから現在までの展開—

東京理科大学 専任講師 金丸 芙美
(言語機能論講座博士課程後期3年の課程修了)

私の多言語研究の始まりは、日本語と台湾語が混合した会話の分析でした。戦前まで50年間日本の植民地台湾では、皇民化教育として日本語が推進された結果、今でも70歳以上の人々の会話には日本語が多く混ざっています。現在では國語（標準中国語）が中心なので、台湾語はゆるやかに衰退していますが、台湾人アイデンティティと関連させて「台湾語の復権の条件」について研究したこともあります。「アメリカ博士号の取得率世界一位」の台湾では、留学と移民の意欲が強く、海外進出の足がかりとして英語と日本語の学習が盛んです。

旧イギリス植民地の香港では日常語は母語の広東語（中国語方言）ですが、返還後も英語が最も重要な言語です。小学校から英語は中国語と同様、文法や読解を重視した学習が行われます。英語にそれだけ時間を費やしても、中国語はOECDの行う国語の国際学力テストで日本以上の成績を治めています。2007年に訪問したヘネシーロード小学は、政府の教育政策のモデル校です（写真）。小学4年のクラスではほとんどがメガネをかけているのは、英語を教育媒体とする英文中学というエリート校に入るために熾烈な競争があるからです。同年齢の約一割が英文中学生になり、香港大学などの一流大学に進学し英語エリートとして香港経済の国際競争力を支えます。香港では、英語と広東語のコードスイッチング、バイリンガル教育、言語と香港人アイデンティティについて研究しました。

シンガポールも旧イギリス植民地ですが、多民族国家で、華人（中国系）、マレー人、インド人が住んでいます。それぞれの人種は固有の文化と民族語が大切に育まれる一方で、能力別の言語教育が行われています。同年齢の1割は英語と民族語と外国語の3言語を、4割は英語と民族語、5割は英語と会話程度の民族語を学びます。能力に合わせた堅実な言語教育が、国際ビジネスの拠点としての社会の発展に不可欠です。本研究科に提出した学位論文「シンガポール華人社会における言語使用と態度に関する社会言語学的研究」は

それぞれの言語の社会的・個人的価値について統計的に分析したものです。

最後にEUの多言語教育プログラム「リンガア」についてお話します。アジアの旧イギリス植民地を研究するうちに、影響を与えてきたヨーロッパに興味を持つようになりました。EU加盟国では「リンガア」によって小4から英語を週に4時限、中学から第二外国語を週に2時限学びます。またEU職員の子弟が通う「ヨーロッパ学校」では将来を担うエリートを養成する多言語・多文化教育がなされています。昨年訪問したEUI（ヨーロッパ連合大学）はEU職員やヨーロッパ学の研究員を輩出しています。リンガアはヨーロッパ市民アイデンティティを創成し、ヨーロッパ市民間のコミュニケーションを高め、経済の活性化を目指します。多言語教育がヨーロッパ共同体の大きな柱となっているのです。

海外進出を目指す台湾、国際ビジネスの拠点として社会の繁栄を目指す香港、シンガポールなど、アジアでは共通して「攻めの言語教育」が行われていました。ヨーロッパでは多言語教育が精神的統合と経済活性化の鍵と見なされています。

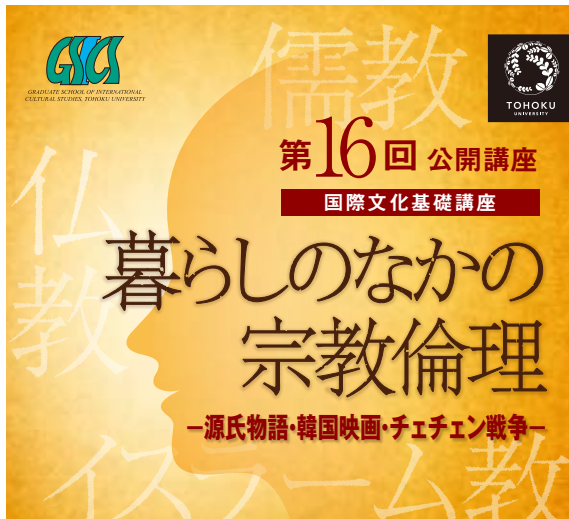
それでは、日本における言語教育の現状はどうか？日本では近年英語早期教育について論争がありました。小5から週に1時限導入することにも反対論がありました。早期からの外国語教育が日本語能力の低下を引き起こし、英語優越主義を助長し日本人アイデンティティを危うくするというのです。

今後日本は一体なにを目指すのでしょうか。例えばもし「アジア共同体」という大きな構想があるとすれば、その実現にはEUの「リンガア」のような言語教育プログラムが重要な鍵となるかもしれません。社会と言語のあり方に展望を持つべく、議論を重ねていきたいものです。



第16回国際文化基礎講座の報告

第16回国際文化基礎講座（平成21年10月～11月）では「暮らしのなかの宗教倫理—源氏物語・韓国映画・チェチェン戦争—」と題して、本研究科の3教員が日頃の研究の一端を披露されました。ここにその講演概要をご紹介します。



光源氏の罪 —カミ信仰、仏教、儒教の見地から—

佐藤 勢紀子
(言語文化交流論講座教授)

『源氏物語』に描かれた「宗教倫理」は、カミ信仰、仏教、儒教などが絡み合い、複雑な姿を見せている。登場人物の罪の意識から、その様相を明らかにすることを試みた。

『源氏物語』における「罪」の用例は181例に上る。登場人物の中では、正編の主人公光源氏をめぐる「罪」の用例が32例と群を抜いて多い。そこで、光源氏の罪意識を中心に考察した。光源氏の罪といえば、父帝の女御藤壺との「密通」が想起されるが、それについての罪悪感描かれているだろうか。また、官位を剥奪され須磨への退去を決意した源氏には罪の意識はあったのだろうか。

本題に入る前に、「罪」の語義について概観した。古代においては、「罪」は現在の「罰」を含む概念であり、また、「災厄」、「過失」、「欠点」などの意味で使われることもあった。当時の「罪」の多義性が注目される。『源氏物語』に出てくる「罪」にも、「刑罰」や「欠点」の意味の用例がある。

現在と同様の意味を持つ「罪」にしても、様々な宗教倫理を背景に多様な文脈で用いられていて、現代人には想像の及びにくい例もある。たとえば、光源氏と藤壺の間に生まれた冷泉帝がその出生の秘密を知らず

にいたことが「罪」になるとされているが、それは不孝を罪悪視する儒教の思想から来ている。また、六条御息所が斎宮となった娘とともに赴いた伊勢の地を「罪深き所」としているのは、神に仕える者が仏道修行をしないことを罪とする仏教的な考え方によるものである。

さて、光源氏はどのような罪の意識を持っていたのだろうか。

若紫巻に若き源氏が僧侶の法話を聞いて罪を自覚する場面があり、その「罪」が藤壺との密通の罪を指すのかどうか議論的になってきた。後年源氏が正妻女三宮と柏木の密通を長年意識してきた罪の報いであると思っていることや、「おそろし」という語が二つの思いに共通して見られることから、若紫巻の罪の自覚に、藤壺と関係を持ったことへの罪悪感を読みとることができる。ただし、源氏は密通の結果としての薫の誕生に際して、仏教でいう「転重軽受」(死後に受けるべき重い罪報を現世で軽く受けること)を思っており、その罪意識の底の浅さも見てとれる。

また、光源氏の須磨退去を描いた須磨巻にも、「罪」という語が多く見られる。しかし、須磨行きの原因となった「罪」について、源氏は無実の罪と考えており、罪悪感は希薄である。

藤壺との密通の「罪」が仏教的な罪業として捉えられ、仏道修行による消尽が試みられているのに対し、須磨退去をもたらした「罪」は身にふりかかった災難のようなものと見なされ、それに対しては神々への祈願や禊が行なわれていることが興味深い。

最後に、後世において、『源氏物語』が様々な宗教倫理の立場からどのように受けとめられたかという問題に触れた。中世・近世には、儒教・仏教の見地から「好色淫靡」とする否定的な見方がある一方で、「勸善懲惡」、「風諭」を描いたとする肯定的な見方もあった。また、戦前には、国家神道の立場から「大不敬」の書であるとする批判も見られた。『源氏物語』をどう見るかということが、それぞれの時代の倫理意識をあらわしているといえよう。



薫を抱く光源氏（国宝「源氏物語絵巻」）

韓国の暮らしに息づく儒教 —ドラマ、映画を通して見る—

佐野 正人
(アジア文化論講座准教授)

韓国の日常生活と日本の日常生活とは例えば一人で食事をしないとか、割り勘をしないなどの異なっている習慣が数々ある。その背景となっているのは、おそらく宗教意識と家族関係との違いであると考えられる。特にこの講義では儒教を中心にした韓国人の宗教意識と、またそれと関係して韓国の家族関係の話を取り上げた。

韓国人の宗教意識はたいへん強く、「宗教大国」とも呼べるほどである。韓国の宗教でもっとも多いのはキリスト教で、全人口の29.2%、人口にすると1,376万人ということになる。日本のキリスト教信者がほぼ全人口の1%（約260万人）であることを考えると、比較にならないほど多い信者数である。次に盛んなのは仏教で、全人口の約22.8%、人口で言う1,073万人となる。日本と似ているように見えるが、韓国の仏教信者には日曜日にお寺に行って礼拝する人々の割合が多い。キリスト教と同じように韓国の仏教徒はしばしば寺院に礼拝したり祈祷しに行き、日本の形式化した仏教とは大きく違っている。3番目に来るのが儒教で、儒教を宗教として見た場合その信者は全人口の0.2%、約10万人となっている。数字的にはたいしたものではないが、しかし儒教はむしろ生活全般を規制する倫

理、習慣といった側面の強い宗教で、韓国のキリスト教や仏教の信者たちも、儒教的な考えに従って生活していると答える人の割合が極めて高いことは注目すべきである。

現代韓国の儒教は、古典的な儒教のあり方とは異なった側面がある。より家族関係や人間関係に深く関わる面があると感じられるためである。つまり、「礼教性」に重点を置いたハードな儒教ではなくて、現代韓国の生活に息づいている儒教はより家族関係・人間関係に中心を移したソフトな儒教なのではないだろうか。

韓国にしばらく住むと様々な人間関係の基本にそれぞれ何らかの様式があることに気が付いて来る。友人関係、先輩後輩関係、師弟関係、夫婦関係、親子関係、社会的な付き合いの関係、それぞれの場面に応じて何らかの基本の様式があり、それに従って韓国人は行動しているように感じられる。

また、韓国のドラマは本質的に「家族関係を描いたドラマ」である。あるいは「家族関係によってストーリーの重要な部分が展開されるドラマ」と言い換えてもよいだろう。恋愛ドラマであれ、歴史ドラマであれ、アクション系のドラマであれ、程度の差はあれ家族は重要な役割として登場している。『猟奇的な彼女』や『人魚姫』というドラマや映画では家族関係がストーリーを展開させるきわめて重要な部分を占めていることが特徴である。それらのドラマ・映画を実際に視聴し、その後質疑応答を行いながら講義を行った。



祈るイスラーム教と祀るイスラーム教
ーチェチェン戦争を通してみるコーカサスのイスラームー
北川 誠一
(イスラーム研究講座教授)

イスラーム教信仰の2つのありかたをロシアと2度の戦争があったチェチェンに例をとってお話しましょう。「祈るイスラーム教」とは、信仰を神と自分との直接関係に限定して実践する態度です。日常生活のモラル、儀礼の体系や宗教的年中行事を守り、その結果として、安心立命が期待されます。このような人々は信仰を社会へ持ち込むことはしませんでした。社会主義の時代に許されたのはまさにそのような信仰のありかたでした。また信仰のあり方は同じでも集団で独特の勤行を行う神秘主義者がいました。1991年、共産党の自治共和国執行部を追放し、ロシアからもその上の組織であるソ連からも独立したチェチェン革命を担ったのは、初代大統領ドゥダイエフ、3代目大統領マスハドフなどこのような人たちだったので、当初政治に宗教は持ち込まれませんでした。まもなく、独善的行動が災いして、敵が多くなったドゥダイエフは神秘主義者に近づきますが、1994-1996年の第1次チェチェン戦争で神秘主義者が組織的に戦闘を担ったわけではありませんでした。彼らの信仰は、イスラーム教を政治社会の組織運営の原理として利用する「祀るイスラーム教」ではなかったからです。

1996年ロシア軍に勝利して、国内からロシアの影響力を排除したチェチェンにイスラーム原理主義（ロシアではワッハーブ派と呼びます）の力が強くなります。原理主義とは、言説を規範化しようとする態度のことです。イスラーム教徒の社会において原理主義は、祀るイスラーム教と結合することによって、強力な社会思想になり、新しい原理によって政治社会を樹立しようとする運動を起こすことになります。その代表格が18世紀のアラビア半島の人アブドゥル=ワッハーブによって起されたワッハーブ派（主義）です。原理主義、ワッハーブ主義という名称は自称ではないので、使うべきではないという幼稚な議論をする人もいますが、学術用語は単なる自称・通称とは別のものです。第1次チェチェン戦争の開始前より、ワッハーブ派の世界宣撫を国策とするサウジ・アラビアなどから、潤沢な資金を持った原理主義の教師、ハッターブを指導者とする軍事的指導者が集まり、社会主義が崩壊して

社会政治的言説が崩壊し、学校教育も行われなかった時期に成長した若者を引き付けました。バサイエフなどのチェチェン人武装集団の指導者も彼らに接近して、武器と資金の援助を受け、選挙によって成立したチェチェン政府を否定し、自己の社会的地位とアイデンティティーをワッハーブ主義に合致したものに書き換えました。1999年、彼らはチェチェンとダゲスタンにイスラーム国家を建設するため、ロシアに聖戦を挑みますが、敗北しました。現在チェチェンでは、イスラーム聖職者のガディロフ大統領、その息子である後継大統領の支配下、政体は世俗的でありながら、社会規範の基礎をイスラーム教信仰に置く社会の再構築が進んでいます。



ドゥダイエフ



原理主義者バサイエフ（左）と世俗主義者マスハドフ（右）。
外見は思想の現れである。

国際文化研究科主催行事の報告

今年度に研究科が主催しましたおもな行事をご報告します。一つは昨年7月に開催した講演会、二つ目は11月に開催した第2回アジア自動車環境フォーラムです。それぞれの行事で活躍されました2人の教員から以下に行事の概要をご紹介します。

国際文化研究科講演会

澤入 要仁

(比較文化論講座准教授、アメリカ研究講座兼任)

去る7月15日、国際文化研究科主催の学術講演会「オバマのアメリカ政治と宗教の新たな局面」が開かれました。在札幌米国総領事館と札幌アメリカンセンターの全面的な協力によって実現した企画です。講師としてお招きしたのは、米国メリーモント大学ランチョパロスベルデス校准教授ロジャー・ロビンズ博士。通訳や質疑応答を交え、たっぷり2時間にわたって講じていただきました。

ロビンズ先生について簡単に紹介しましょう。先生はアメリカの政治と宗教の相互関係に関する考察と提言で知られ、その著書には、「神の教会」の創設者A. J. トムリンソン(1865-1943)を論じた『A. J. トムリンソン』(2004)などがあります。現在、フルブライト招聘教授として東京大学で研究と教育に従事するかわら、各地でアメリカの最新の動向を紹介されています。昨年2月には本研究科のアメリカ研究公開講座も担当していただき、先の大統領選挙で共和党の副大統領候補として話題になったサラ・ペイリンの支持基盤でもあるペンテコスタリズムをめぐって、その歴史と政治関与について論じられました。

さて、今回の講演会は、司会進行を担当するアメリカ研究講座の井川眞砂教授による開会の言葉からはじまり、続いて、ダーナ・ウェルトン在札幌米国総領事の挨拶を頂戴しました。総領事館の文化事業にとって、仙台、とくに東北大学は重要な拠点であって、その拠点で今回の講演会を開催できることは喜ばしい、アメリカの変化について大いに学んでほしい、という挨拶でした。

いよいよ、りゅうとしたロビンズ先生が登壇。よく通る声で話されました。かいつまんでいうなら、民主党オバマ政権のもとで、アメリカの政治と宗教との関係がこれまで以上に大きく変わりつつある、という内容です。その変化について、具体例をあげながら、そしてときに比喻を織りまぜながら指摘されたのです。

まず、政治の側に起こった変化を説明しましょう。ロビンズ先生によると、これまではよく知られているように、保守的な共和党の方が保守的なキリスト教勢力を熱心に囲い込むことに成功してきました。一方、民主党の方は、政教分離に努めていて、キリスト教勢力と距離をおいてきたのが実情でした。ところが近年、

民主党が共和党の手法を学習し、宗教勢力を巧みに取り込んで利用するようになってきた、というのです。すなわち、民主党がいわば共和党のお株を奪ってしまった。先生の言葉をかりるなら、皮肉なことに「共和党が……民主党を再活性化してしまった」、ということになるのです。

同時に宗教の側にも大きな変化が生じました。これまで福音派は、宗教右派の代表として、保守的な共和党と結びついてきましたが、現在ではその福音派の中から、リベラルな新しい福音派が台頭し、オバマや民主党を支持するようになった、というのです。つまり宗教右派であったはずの福音派が変質し、リベラルな民主党を支持する一派を作りだしました。再び先生の言葉をかりるなら、「宗教右派は、神様を箱から取りだして解放したものの、今や、その神様をもとの箱に収めることができなくなってしまった」という状況になっているのです。「リベラル」と「福音派」という、以前ならばけっして組み合わせられることがなかった言葉が組み合わせられるようになったのが、アメリカ宗教の現在なのです。

このようにアメリカでは、二大政党とキリスト教勢力がそれぞれ内部から大きな変貌を遂げ、従来の政治宗教相関図をすっかり塗りかえつつある、と論じられました。これは、現代アメリカの政治だけでなく、これまでのアメリカの歴史や未来のアメリカ社会を考える上でも、きわめて重要な示唆を与える刺激的な議論といえるでしょう。

先生の講演に続けて、本研究科からアメリカ研究講座(兼任)の澤入がコメントを述べ、本講演の特徴を三点指摘するとともに、アメリカの政治と宗教の将来に関する先生の予測をうかがいました。そして参加者との質疑応答。オバマとキリスト教の関連だけでなく、オバマとイスラム教の関連についても受け答えがありました。最後に、国際文化研究科長の小林文生教授から、本講演会のもつ意義と示唆を認め、関係者に感謝する閉会の挨拶がありました。

本研究科は、平成19年12月にも学術講演会を開催しています。それは、直前に迫った大統領予備選の行方を占う、マッシー・リッチ氏の講演会でした。それから約1年半。オバマ大統領の就任から半年たち、一時の興奮がさめた時点から、大統領選の宗教的背景を解析した今回の講演会は、リッチ氏の講演会と同様、じつにタイムリーな企画になりました。

第2回アジア自動車環境フォーラム (2nd Asian Automotive Environmental Forum) を終えて

劉 庭秀

(国際環境システム論講座准教授、アジア自動車環境フォーラム副会長)

昨年11月13～14日、本研究科が主催し、環境省、経産省、宮城県、仙台市、日本自動車工業会などの後援によって「第2回アジア自動車環境フォーラム」が開催された。このフォーラムには、世界11ヶ国（中国、韓国、マレーシア、フィリピン、ベトナム、モンゴル国、ドイツ、アメリカ、オーストリア、オーストラリア、ウガンダなど）から約380人が出席（約210機関）し、東北大学100周年記念館「川内萩ホール」にて盛大に行われた。世界的な金融危機、インフルエンザ流行の中、地方都市での開催ということもあり、スポンサーや参加者を如何に確保するかが大きな課題であったが、アジアだけではなく、世界各国から多様な分野の有力機関が出席し、各メディアの注目を集めた。フォーラム終了後、産学官を問わず、幅広い分野から沢山の出席者があったこと、「自動車リサイクル」をテーマに専門家と一般市民を分けて効率よく議論が行われたこと、産業視察コースに産学連携の研究成果（宮城県3R研究開発事業：(株)ヨシムラみやぎ自動車リサイクルセンターと劉庭秀准教授の共同研究、平成20～22年）が詳細に公開されたことなどが高く評価された。

世界の自動車生産・販売の中心が欧米からアジア新興国へ移行している中、自動車環境問題の解決とその

対応が急がれていることを反映し、多くの参加者は、次世代自動車の製造・販売・使用を始め、中古部品及び再生資源の流通、廃棄物処理等に高い関心を示した。すなわち、今回のフォーラムは、前回に比べてより多くの利害関係者から注目を集め、産学官連携、国際的な再生資源循環の可能性を提示したと言える。出席者の顔ぶれをみても、関係省庁、各自治体、自動車製造・販売会社、大学及び研究機関、中古部品販売・流通業者、資源リサイクル業者、NGO・NPO、廃棄物処理業者、各種メディア等々、前回のフォーラムとは全く違う様子だった。

今回の講演及び議論内容から、今後、日本は制度設計、技術協力、中古部品流通で、強いリーダーシップを取っていくことが必要であり、資源循環（レアメタルを含む）では、アジア諸国の協力と連携が必要不可欠であることがわかった。殊に各国の政府関係者、リサイクル業者、研究者らが「都市鉱山採掘（廃棄物から再生資源の回収）」の重要性に高い関心を示していたことは興味深い。

さらに、日中韓とその他のアジア諸国間のコミュニケーションと優秀な人材交流を活性化し、アジアのみならず、世界自動車産業における環境問題への共通認識と対応策を議論していくことが重要である。今後、このフォーラムが各国の多様な利害関係者との議論及び情報交換の場の提供し、現場中心の産学官連携の可能性を提示していくことを期待する。

最後に、本フォーラムの開催・運営に当たり、様々なご支援・ご協力を頂いた国際文化研究科の皆様に深く御礼申し上げたい。



事務局より

① 同窓会メールマガジンについて

事務局では会員の皆さまに興味をもっていただける情報を随時お届けしたいと思います。また、会員の皆さまからもメールマガジンに掲載してほしい情報などをお寄せください。

② メールアドレスについて

メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

国際文化研究科同窓会〈dosokai@intcul.tohoku.ac.jp〉

③ 同窓会ホームページ

これまでの総会、理事会、会報、メールマガジンなどの情報を掲載していますのでご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/dosokai/>

④ 同窓会懇親会について

事務局では会員の要望に基づき懇親会を開催したいと考えていますので、開催希望などをお寄せください。

⑤ ご意見・ご提案等を！

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたらご連絡願います。お寄せいただいた個人情報は厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

⑥ 会費・寄付金の納入のお願い

会則第11条第1項及び12条に基づき会員の皆さまに会費等の納入をお願いいたします。

○ 入学、進学及び編入学者で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生：6,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生：

編入学者：8,000円

進学者○：6,000円

○ 上記以外の方（修了生、在学生、現教職員・元教職員等）には、ご寄付という形のご支援をお願いできますと幸いです。

○ 会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口へ直接お納めください。

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号：02220-5-66621